はじめまして

生命、そして平和の大切さを伝え続けて 20 年

朗読劇サークル『麦わら帽子の会』（伊勢崎市）

会の発足からかかわり続けている山田郁子さんにレポートしていただきました。

１９９１年公民館から地域への発信めざして

1991 年 10 月、当時の中央公民館・館長からお呼びがかかりました。集まった顔ぶれは多彩で、公民館を中心に活動をしていたサークルの中心メンバー男女 15 名程､20 代から 50 代前半でした。

「公民館は地域社会に何ができるか」―こんな難しいテーマが投げかけられました。当時はまだまだサークルの数も少なく、あまり活発ではありませんでした。館長いわく「公民館から地域へ何かを発信してゆくことはできないか」―雲をつかむような話でした。1 回目は何も決まらぬまま解散。2 回目のとき、館長がやおら朝日新聞の切り抜きを配り提案したのが、演劇制作体・地人会の『この子たちの夏―ヒロシマ、ナガサキ　1945』という朗読劇でした。でも、驚いたことに館長はこの作品を見ていなかったのです。

私たちも、ぜひやってみたい

私は地人会と連絡をとり、幸い東京で公演中でしたので見に行きました。朗読劇という形態も新鮮でしたが、なによりもその内容、迫力に圧倒され、ぜひやりたいという思いに駆られました。帰りに地人会の事務所から脚本とビデオテープを買い求めました。

3 回目はみんなでビデオを見ました。これで決まりでした。ところが､出演者が女性だけなので、4 回目からは、男性は来なくなりました。伊勢崎市の広報で会員を募集し 10 名程でめでたく発会と相成りました。

毎週金曜日の夜、7 時半から 9 時半までを練習日とし、発声、発音、早口ことばなど訓練を重ねました。

人類史上類をみないあの原爆投下による地獄絵図のさまを 4000 余にものぼる遺稿、詩、短歌、俳句をもとに、母たちの叫び、悲しみ、怒りを、朗読と映像と音楽で一体として表現する構成劇です。練習中に何度も絶句したり、涙で脚本が見えなくなったりしました。私たち会員はいままでこんなにも原爆について無知であったかと思い知らされました。

学びつつ歩きつづけて

発会して 1 周年、伊勢崎市文化会館ホールでの旗揚げ公演は大成功。20 万円の収益金は広島原爆病院と長崎原爆病院の、今なお原爆症で苦しんでいる被爆者の方々へ送らせていただきました。

公演活動も少しずつ増えて、毎年市内の中学校での公演のほか、富岡市、高崎市、前橋市、境町などに広がりました。市内の第二中学校では 13 年間続きました。平和教育の一環として市立伊勢崎高校では、生徒会、演劇部の生徒も出演し、おおいに盛り上がり 3 年連続で公演できました。現場の教師集団の力と感謝しております。

学びつつ行動しつつの活動を続け、平和慰霊の旅は、広島、長崎、沖縄そして再び広島へ、そして被爆者のかたへ。一人芝居で核廃絶を訴え続ける長崎の渡辺さんや広島の坪井直さんとの出会いと交流は私たちを高めました。沖縄ではひめゆり

部隊の生存者のかたと知り合い、「沖縄戦の悲惨さは語り継ぐこと１回１回が苦しくて、苦しくて」とおっしゃる姿が瞼に焼き付いております。

オリジナルの朗読劇づくりに

5 年ほど前から、『この子たちの夏』は地人会の作者の意向で公演禁止となりました。このことを契機に私たちは、戦争を語り継いでいく次の道を探しました。戦争を主題とした物語を朗読劇に創作し、小学校や市内の各所での公演活動を展開することです。

《会と活動をともにしてきた横断幕》

一方、伊勢崎空襲の実話をもとに、掘り起こしと作品化にも取り組みレパートリーが広がっています。発足から 20 年、いよいよこれから公民館が投げかけたものに答が出てくるのではないでしょうか。

現在、小学校では 6 年生の社会科で第二次世界大戦の勉強をします。伊勢崎市のある小学校では毎年 12 月に 6 年生全体で、私たち麦わら帽子の会の朗読劇を鑑賞します。

戦争を主題にした物語、そして伊勢崎空襲の実話を作品化したばかりですから、こんな話から入ってゆきます―「みなさん、今から○年前、この伊勢崎も戦場だったのですよ。みなさんのお父さんやお母さんも、先生もまだ生まれていなかった頃、アメリカの爆撃機が伊勢崎の空を覆い何百個もの爆弾をおとし、伊勢崎は焼け野原となり、たくさんの人が命をおとしたのですよ。」「ええっ、うそ。」子どもたちがざわめきます。こうして、何がはじまるのか、期待に満ちた真剣な目が集中します。

はじめは、『かわいそうなぞう』。毒餌を食べない大きな象に、一滴の水も餌もあたえず餓死させた、上野動物園で本当にあった残酷で悲しい物語。子どもたちは食い入るように聴き、涙し、やがて怒る。

次に、『伸ちゃんのさんりんしゃ』。三歳の伸ちゃん。さんりんしゃがほしくて、ほしくてたまらない。おじさんからもらうことができ、大喜びで遊んでいるとき原爆に。さんりんしゃのにぎりをしっかりもったまま幼い命はきえた。この赤さびたさんりんしゃは今でも広島の原爆資料館に展示されている。

そのあとに、伊勢崎空襲で亡くなったおばあちゃんの話、あかちゃんを胸にしっかりだいたまま死んだ若いおかあさんの話、などを加えることもあります。

子どもたちの声に背中を押され

いま、麦わら帽子の会には宝物のように大切にしているものがあります。毎年寄せられる生徒たちからの感想文集です。すでに 20 冊をこえます。

命の重み、平和の大切さ、戦争の残酷さ愚かさをしっかり受け止めたものばかりです。私たちはこの子どもたちの声に励まされ、背中を押されながら、1 年、また 1 年と歩んでいます。

中学 1 年生の感想から

とても勉強になったことは言うまでもなく いつわりのない悲惨で愚かな争いの劇を見て聞いて心に残ったのは、今まで国語や道徳等、本で読んだ「大変だった」というものではなく、言葉では表現できない、現実的な感情でした。　「痛い」とか「悲しい」とかそんなものじゃないのだと思いました。そこには人々の怒り、憎しみももちろん存在した、ということも感じました。ただ単にコワイと思うだけでなく、こんな過ちは二度と繰り返してはいけないのだと。新たに学びました。